

# 巖谷小波と木村小舟とグリム童話

—巖谷小波編『教訓お伽噺』（明治44年）について

西 口 拓 子\*

はじめに

博文館から1911（明治44）年に刊行された『学校家庭 教訓お伽噺 西洋之部』（以下『教訓お伽噺』と略す）には150の話が掲載されている。88番めに収録された「鶯鳥料理」という短い話がある。

むかし或る富豪が、日頃仲よくする二人の友達を招いて、御馳走をしようとしたことがあります。其時主人は、お抱への料理人に云ひつけて、三羽の鶯鳥を料理させました。料理人は又、日頃の手並を見せて、お客様のお褒めに預らねばならぬと、腕に撚りをかけて、手際のよい料理をしましたが、さて出来上つて見ますと、如何にもおいしさうで、咽がゴロゴロ鳴り出しました。そこで料理人は、『エエままよ、知れたら知れた時だ。食ってやれ食ってやれ』と、一つ残らず食べてしまつて、何食はぬ顔をして居ました。

さて又主人は、もう今に來客がある時分だと云ふので、自分に（ママ）ナイフやホークを調べ、座敷の飾り付けをして、心待ちに待つて居ますと、やがて威勢よい馬車の音が、ハタと門前に止つたかと思ふと、チリンチリンと呼鈴が鳴り出しました。此の音に驚いたのは料理人です。今お客に上られては、夫れこそ一大事なので、大急ぎで玄関へ走り出し、『ハイハイよくいらつしやいました。併し

---

\*専修大学経営学部教授

内の主人は……』と、ツカツカお客の側により耳うちして話すには、『イヤ實は何です。内の主人は人間の耳が……牛の舌よりも旨いとかで、貴方方に鶯鳥を差し上げて、其お禮に耳を貰ふと云つて居ました』と、ありもせぬ嘘を吐きましたら、御客は聞いて吃驚して、『こりや大變だ。うつかり上らうものなら片輪にされる所だつた。劍呑々々！』と、急いで馬車に一鞭あてて、ドンドン逃げ出してしまうました。後で料理人は、顔色を變へて、主人の前へ出て、聲震はせながら、『御主人様、只今のお客様は大變な盜賊です、玄關へ下りたら鶯鳥の香ひがすると云ふので、ツカツカと料理場へやつて來まして、二人で一羽宛持ち逃げをしました』と、又いい加減の嘘を並べました。主人は之を聞いてがっかりしましたが、もう其後は、決して鶯鳥の料理をしませんでした。(330-332頁。下線は筆者による。)<sup>1</sup>

料理人の性別は明記されていないが「食ってやれ」という言葉や、ひとりで鶯鳥を三羽とも食べていることから、男性的な印象を受ける。この話の挿絵(図1)には、豪快に肉を食べる男性の姿が描かれている。本稿の第1節では、これが遡れば【賢いグレーテル】(KHM 77)<sup>2</sup>というグリム童話であり、女の料理人の話であることを明らかにする。しかしながら、先行研究では「鶯鳥料理」はグリム童話として取り上げられていない。それも無理はない。【賢いグレーテル】とはかなり異なる話になっているからだ。

## 1. 【賢いグレーテル】と「鶯鳥料理」

### 1.1. グリム童話【賢いグレーテル】(KHM 77)

グリムの原話を確認しておこう。料理人のグレーテルは、味見と称しては、満腹になるまでつまみ食いをする。ある時、主人が客をひとり招待し、鶏を二羽焼くように命じられる。未だ到着しない客を主人が呼びに行っている間、グレーテルはジョッキでワインを飲む(図2)。美味しく焼けた



図1 画家名明記なし「鷺鳥料理」  
『教訓お伽噺』（国立国会図書館蔵）



図2 ウベローデ画【賢いグレートル】  
（筆者蔵）

鶏を見て、「羽が焦げているから」「羽は両方ともないほうが、足りないと思われなくて良い」などの理由をつけつつ、ワインを飲みながら、二羽とも食べ尽くしてしまう。客が到着した時、主人は取り分け用のナイフを研いでいる。グレートルは、客に「主人はあなたの耳を切るつもりだ」と嘘をつく。客は逃げる。グレートルは、主人に「客が鶏を二羽とも持って逃げた」と嘘を重ねる。主人は、「ひとつでいいから」と叫びながら客を追う。自分の分の一羽だけでも返せという意味だが、客は「耳はひとつでいいから」という意味だと思い込み、慌てて逃げる。

グリムの【賢いグレートル】は、このような笑話である。調理するのは「鶏」であり、招待する客も一名である。図3には耳をおさえながら逃げる客がひとり描かれている。料理人は女性で、ドイツの挿絵には女性が描かれている。図2と3のウベローデ（Otto Ubbelohde 1867-1922年）だけでなく、図4のようなリービヒ（Curt Liebich 1868-1937年）の例もある。それが、どのようにして前節で引用した話に姿を変えてしまったのか。それを本稿第1節での考察で明らかにする。

『教訓お伽噺』の編者は、日本の児童文学の創始者と言われる巖谷小波（本名 季雄1870-1933年）である。小波は『少年世界』や『幼年世界』『少



図3 ウベローデ画【賢いグレーテル】（筆者蔵）



図4 リービヒ画【賢いグレーテル】（筆者蔵）

女世界』等，博文館の雑誌の主筆を兼ね，活躍した。昔話関連でも『日本昔噺』や『世界お伽噺』など，シリーズで多数の作品を手掛けている。その他，翻案作品でも知られている。『少年世界』に掲載した「小雪姫」（明治29年4月）は，グリム童話の【白雪姫】（KHM 53）を自由に語りなおしたものである<sup>3</sup>。では，「鶯鳥料理」も，巖谷小波が自由に書き換えたものののだろうか。

小波の翻案作品では，「鬼車」（1888－89年『我楽多文庫』）や「七羽鳥」（1891年『幼年雑誌』）も知られている。これらはドイツのオットーのメルヒェン“Der Jugend Lieblings-Märchenschatz von Franz Otto”（Leipzig und Berlin 1880）の翻案である<sup>4</sup>。小波はこれを原書で愛読していたという<sup>5</sup>。



藩医であった父親の意向で8歳の時からドイツ語を学んでいたのである。1885年に独逸学協会学校に転学して以降、本格的にドイツ語の学習に取り組んだという。1900年から1902年までドイツのベルリン大学付属東洋語学校で講師として日本語を教授した経験も持つ。滞独経験もあり、ドイツ語を良く解したのである。

## 1.2. 『学校家庭 教訓お伽噺 西洋之部』と『教訓お伽夜話 前編』

本稿の考察対象は『教訓お伽噺』の「西洋之部」である。その姉妹篇として、翌年に同じ博文館から「東洋之部」が刊行された（本稿では、「東洋之部」所収の話を考察対象としないため、以下『教訓お伽噺』と明記した場合は「西洋之部」を指す）。「東洋之部」の凡例には「日本、支那、印度」の話100編を収めたと記されている。一方で、先行する「西洋之部」では、150話の出典は明記されていない。巻頭の「自序」に「グリム」と「イソップ」への言及があるが、はっきりしない。『教訓お伽噺』への言及が、よく似た書名で1919年に出版された『教訓お伽夜話 前編』（博文館）の緒言にあるので見てみよう。

曩に編纂発行したる教訓お伽噺は、意外の好評を博して、版を重ねること五六回、為に原型大半磨損したれば、此の度體裁を改め、面目を一新して、再び讀者に見ゆることとなりました。イソップとグリムの物語を骨子として、其西洋の部を編みましたが、今度改訂縮刷するに就いては、新らしく二三のものを補ひ前書にあつた短篇を捨てて都合百篇としました。（『教訓お伽夜話 前編』「緒言」より。下線は筆者。）

ここから、『教訓お伽夜話 前編』が『教訓お伽噺』を再編集したものであること、先行書『教訓お伽噺』がイソップとグリムの話を中心に編纂したものであることが分かる。「鶯鳥料理」は、『教訓お伽夜話 前編』に

ほぼそのままの形で転載された<sup>6</sup>。

日本におけるグリム童話の受容に関する先行研究には、「翻訳作品別目録」や「グリム翻訳総合年表」<sup>7</sup> 等がある。ところが、どちらにも「鶯鳥料理」はグリム童話として取り上げられていない。『教訓お伽夜話 前編』は「グリム翻訳総合年表」で取り上げられ、そのうち31話がグリム童話の翻訳としてタイトルが列挙されているが<sup>8</sup>，その中に「鶯鳥料理」は含まれない。理由は、冒頭で示した通り、話があまりにも異なっているからだろう。

『教訓お伽噺』に話を戻すと、どれがグリム童話であるかさえ一切明記されていないことが目をひく。そもそも出典・底本が示されていないのだ。忠実な翻訳ではないために判別は困難であるが、慎重に読んでいくと、イソップの話とグリム童話がランダムに配置されていることが分かる。今回の考察により、150のうちの42話が、遡るとグリム童話（うち1話は「子どものための聖者伝」）であることが分かった（本稿1.4に掲載の対照表を参照）。本稿ではこの42話を考察する。

驚かざるを得ないのは、これらが英語訳からの重訳であると感じさせる邦訳文であることだ。19世紀のグリム童話の英語訳は、必ずしも忠実な翻訳ではないことが多く、それが重訳された場合にも、邦訳テキストに英語訳の特徴が残る。ドイツ語の堪能な巖谷小波が、敢えてオリジナルでない英語訳からグリム童話を翻訳したのだろうか。

### 1.3. ウェーナート版の特徴との一致

前節で言及した英語訳とは、1853年に“Household Stories”というタイトルで初版が出版された有名なものである。ウェーナート (Edward Henry Wehnert 1813–1868年) が描いた挿絵が付けられている。翻訳者名が不明なため、本稿では以下「ウェーナート版」と略記する。挿絵画家のウェーナートに関しても、生没年以外の詳細は明らかでない<sup>9</sup>。

『教訓お伽噺』の翻訳テキストには、グリムのオリジナルと異なる箇所が少なくない。一部は邦訳の段階で変えられたとみられるが、その他にウェーナート版での変更点と奇妙に一致する箇所が散見される。それらの例をいくつか紹介する。

「雪の苺」の継母は薄い紙で作った「外套」を継子に着せて冬の森に苺を摘みに行かせるが、グリムの【森の中の三人の小人】(KHM 13)では紙の「服」である。「三つの難題」の聡明な童は「天にある星の数」を問われて、紙に「針で無数の穴をあけ」て、その穴の数だけ存在すると答えている。グリムの【牧童】(KHM 152)では「ペンで細かい点を打つ」とあるのみで、穴を開けてはいない。「貧者の望み」で人間界を歩くのは「天使」だが、グリムの【貧乏人と金持ち】では「神」である。「血瓶の室」では、さらわれた娘は「袋」に入れて連れ去られる（図5参照）が、グリムの【フィッチャーの鳥】(KHM 46)では「籠」である。

これらは一部の例だが、全てがウェーナート版での変更点と一致している。

#### 1.4. 和田垣・星野訳『家庭お伽噺』との一致

英語訳ウェーナート版は、好評を博し増刷を重ねたが、日本においても初期のグリム童話翻訳の底本として用いられた。例として『小學講話材料 西洋妖怪奇談』（澁江保訳，1891年）や『グリム原著 家庭お伽噺』（和田垣謙三・星野久成共訳，1909年，以下『家庭お伽噺』と略す）がある<sup>10</sup>。和

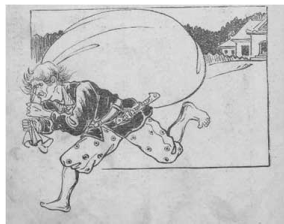


図5 「血瓶の室」 画家名明記なし『教訓お伽噺』（国立国会図書館蔵）

田垣・星野の翻訳は、「それまでの最大の訳書である橋本青雨訳『独逸童話集』の二倍以上」<sup>11</sup>にあたる58話を収めており、日本におけるグリム童話翻訳の中で重要な位置を占める。和田垣は相当のドイツ語力を備えていたにもかかわらず、翻訳底本には英語のウェーナート版が使われている<sup>12</sup>。本稿の前節で指摘したウェーナート版の特徴は、全て和田垣・星野訳『家庭お伽噺』のテキストにもあてはまるのである<sup>13</sup>。例えば、前節で指摘した「血瓶の室」で「袋」が用いられているのは、和田垣・星野訳でも同様なのである。

では、同じウェーナート版をもとに、巖谷編でも独自に翻訳を行ったのだろうか。具体例として「魔法の先生」(KHM 68)を見てみよう。巖谷も和田垣・星野も、「30ターラー」(ウェーナート版では thirty dollars)を「三百圓」と翻訳している。これは偶然の一致かもしれない。しかしながら「200ターラー」(ウェーナート版では two hundred dollars)の翻訳がどちらも「五千圓」となっており、2を5に変えて翻訳している点で一致するのは不自然ではないだろうか。さらなる例を見てみよう。

グリム童話【賢いちびの仕立て屋】(KHM 114)では、仕立て屋の男は、王女と結婚するためには熊のもとで一晩を過ごさなくてはならない。男はバイオリンで熊を魅了した後、万力で熊を押さえつけて無事に過ごす。ウェーナート版でもここはそのまま翻訳されている。この話は巖谷編では「胡弓の徳」というタイトルだが、胡弓を弾くと熊は踊り出し、夜通し踊って危害を加えないため、万力で押さえつける必要がなくなっている。これも、和田垣・星野が行った改変と一致している。和田垣・星野の翻訳は——明治期には珍しいことではないが——一部でかなり自由に書き換えているのだが、その変更点が巖谷小波編の『教訓お伽噺』にも良く似た形でみられるのだ。例えば、巖谷編の「鶏と鎌と猫」では、グリムの【三人の幸せ者】(KHM 70)で語られる後日譚が省かれている。そこが和田垣・星野の「三つの寶」と一致している。さらに巖谷編の「大大根」では、弟は大

大根を王に献上して成功し、兄のほうは失敗している。兄は最後に「赤恥かいて、<sup>その</sup>其まま御殿を引退りましたが、<sup>ひきさが</sup>之よりは全く心を入れ替えて、弟とも仲よくなり、とうとう立派に出世をしました」（18－19頁）<sup>14</sup>とある。グリムの【かぶ】では、弟の成功を妬んだ兄は、殺し屋を雇い、弟を袋に入れて木に吊るしている。上記の変更は、兄の性格にかかわる重大なものだが、これも和田垣・星野訳「大きな大根」で行われた変更内容とほぼ一致している<sup>15</sup>。「鶏と鎌と猫」のような省略の場合には、偶然の一致の可能性も排除できないが、「大大根」のほうは、「兄」の性格の変わり方も一致しており、偶然とは考えられない。

さらなる例で特徴的なものを以下の表に挙げる。『教訓お伽噺』がどれだけ和田垣・星野訳と符合するのかは、ウェーナート版（英語訳）およびグリムのオリジナルとの比較で明らかとなる。

「巖谷編タイトル」 【グリム版タイトル】	巖谷小波編 1911年	和田垣・星野訳 1909年	ウェーナート版 1853年	グリム(第6, 7 版)
「大大根」【かぶ】	大根	大根	かぶ turnip	かぶ Rübe
「鴨の念仏」 【狐と鶩鳥】	鴨	鴨	鶩鳥 geese	鶩鳥 Gänse
「鶩の御殿」 【みそさざいと熊】	鶩	鶩	みそさざい wren	みそさざい Zaunkönig
「犬殺し」【犬と雀】	燕	燕	雀 sparrow	雀 Sperling
「白蛇の肉」 【白い蛇】	鶩鳥（がてう）	鶩鳥（がてう）	カモ、アヒル ducks	カモ、アヒル Enten
「生命の葉」 【三枚の蛇の葉】	女と船長は「泥船」で海に流される。	女と船長は「泥船」で海に流される。	女と船長は「穴だらけの船」で海に流される。	女と船長は「穴だらけの船」で海に流される。
「鶩鳥料理」 【賢いグレートル】	富豪が、仲のよい友達を二名招待する	大金持ちが極悪意の友達を二名招待する	主人は客を一名招待する	主人は客を一名招待する
	鶩鳥（がてう）を三羽調理	鶩鳥（がてう）を三匹調理	鶏を二羽調理 two fowls	鶏を二羽調理 zwei Hühner
「麦の穂」 【麦の穂】	汚れた子を拭くのは男性	汚れた子を拭くのは父親	汚れた子を拭くのは母親	汚れた子を拭くのは母親
「犬若殿」 【三つの言葉】	主人公の男性は犬の言葉のみを習得	主人公の男性は犬の言葉のみを習得	主人公の男性は三つの動物の言葉を習得	主人公の男性は三つの動物の言葉を習得

こうした一致は、比喩表現にもみられる。巖谷小波編の「目と手と心臓」(【三人の軍医】KHM 118)には、軍医が自分の技を自慢する様子が「天狗の<sup>やう</sup>様に鼻を高くして」(139頁)と表現されている。これらも和田垣・星野の「三人軍医」とほぼ同じ表現であり、グリム版にもウェーナート版にもみられないものである。その他「犬殺し」では、表に示したように、犬の仇を討つ「雀」が、和田垣・星野と同様に「燕」に変えられているだけではない。犬を轢き殺した御者の運命が酷似している。最後の場面を比べてみよう。

グリム：御者は、妻におのを渡して「俺の口の中の鳥を打ち殺してくれ」と言いました。妻は打ちつけますが、失敗してちょうど御者の頭を打ってしまったので、御者は倒れて死にました。雀のほうは飛び出して、逃げました。(第6版<sup>16</sup> Bd. 1 S. 350)

巖谷編：只一匹の犬を殺したばかりに、明日から乞食同然の身となり、獣にも劣る様な暮らしをしましたとさ。(312頁)

和田垣・星野訳：ただ 犬一匹殺したばかりで、一生人間界から追ひ出されて、獣にも劣る乞食となつて世を渡りましたとさ。(130頁)

妻が誤って夫を殴り殺す残酷な場面がなくなるかわりに、「乞食」という言葉が使われていることが、和田垣・星野の翻訳と一致している。ウェーナート版は、上記の引用部はグリム版をほぼ忠実に英語にしている。

このようにテキストを比較すると、『教訓お伽噺』には遡るとグリム童話(と聖者伝)だと考えられる話が42話あり、そのうち実に37話が和田垣・星野訳に(部分的であれ)酷似している。和田垣・星野訳は忠実な翻訳ではなく、彼らが大胆に変更した箇所が巖谷編の話のうち37話で一致して

いるのである。それらはドイツ語の原典もしくは英語のウェーナート版を直接翻訳したならば、似ることは考えられない性質のものである。

『教訓お伽噺』所収の話で、遡るとグリム童話（と聖者伝）だと考えられる42話のタイトルと、それに対応する和田垣・星野訳のタイトル、および『グリム童話集』でのタイトルの日本語訳を、資料としてここに載せる。（下線は筆者による。算用数字は、それぞれの巻における収録番号を示す。）『教訓お伽噺』のタイトルの下線部は特に、グリムの原典よりも和田垣・星野訳に近いことを示している。

巖谷小波編タイトル	和田垣・星野訳タイトル	KHM 番号	グリム童話タイトル
1 十二王子	——（なし）	KHM 9	十二人の兄弟
3 大根	33 <u>大きな大根</u>	KHM 146	かぶ
5 魔法の先生	21 魔法傳授	KHM 68	泥棒とその親方
6 雪の苺	11 森の小人	KHM 13	森の中の三人の小人
10 旅人の不注意	41 急がば廻れ	KHM 184	くぎ
11 大力男	55 大男	KHM 90	若い大男
14 奇妙な音楽者	2 藝は身を助く	KHM 27	プレーメンの音楽隊
17 生命の葉	15 蛇の葉	KHM 16	三枚の蛇の葉
20 三つの難題	58 奇問奇答	KHM 152	牧童
22 奇態な骨笛	4 骨の笛	KHM 28	歌う骨
24 貧者の望み	25 三つの願	KHM 87	貧乏人と金持ち
30 白蛇の肉	1 白蛇	KHM 17	白い蛇
31 大根の葉	49 悪魔の寶	KHM 189	百姓と悪魔
32 目と手と心臓	30 三人軍醫	KHM 118	三人の軍医
37 犬若殿	3 犬の言葉	KHM 33	三つの言葉
43 十三の宮	8 悔い改めよ	KHM 3	マリアの子
45 狐は下男	——（なし）	KHM 73	狼と狐
46 なまけ <u>夫婦</u>	34 なまけ <u>夫婦</u>	KHM 164	なまけ者の <u>ハインツ</u>
47 物臭くらべ	35 物臭王子	KHM 151	三人のなまけ者
54 <u>正直</u> の靴	54 <u>正直</u> 靴屋	KHM 39-1	小人たち
56 黄金の魚	24 黄金丸	KHM 85	金の子どもたち
57 獅子釣り	——（なし）	KHM 132	狐と馬
61 魔法の腕輪	32 腕輪の功德	KHM 121	恐いもの知らずの王子
66 恵みの鍋	56 恵みの肉汁	KHM 103	おいしいお粥
72 末の王子	20 三つの羽毛	KHM 63	三枚の鳥の羽根
74 金の鍵	45 孝行の徳	KHM 200	金の鍵



75 鶏と鎌と猫	22 三つの寶	KHM 70 三人の幸せ者
78 血瓶の室	38 鳥娘	KHM 46 フィッチャーの鳥
83 犬殺し	16 燕の仇討	KHM 58 犬と雀
84 胡弓の徳	31 大膽な男	KHM 114 賢いちびの仕立て屋
86 慾の石炭	48 黄金の石炭	KHM 182 小人の贈り物
88 鷺鳥料理	23 氣のきいた料理番	KHM 77 賢いグレーテル
99 麦の穂	57 麦の穂	KHM 194 麦の穂
101 鴨の念仏	28 狐と鴨	KHM 86 狐と鷺鳥
106 至当の罰	52 青葉の杖	KL 6 <sup>17</sup> 三本の緑の枝
114 黄金の靴	27 眞珠姫	KHM 21 灰かぶり
123 狼の失策	10 狼と人間	KHM 72 狼と人間
139 赤い帽子	(7 赤帽さん)	KHM 26 赤ずきん
145 鷺の御殿	29 熊と鷺	KHM 102 みそざざいと熊
146 智慧ある犬	14 犬の心	KHM 48 ズルタンじいさん
148 老兵士	50 勇敢なる兵士	KHM 199 水牛の革の長靴
149 小雪姫	—— (なし)	KHM 53 白雪姫

念のため、逆の可能性も考察しておく必要があるだろう。和田垣・星野が巖谷編の翻訳を利用した可能性である。巖谷小波には非常に多数の著作があるからだ。「明治十九年から没年（昭八）まで四十八年の間、新聞、雑誌に発表した作品は三千四百余篇」あり、「そのうち単行本として出版したのは四百余冊」<sup>18</sup> だという。そのため、著作年表に漏れている版が存在する可能性——『教訓お伽噺』が何らかの形で1909年以前に出版された可能性——もあるかもしれない。ただし『教訓お伽噺』にはイソップとグリムがランダムに掲載されており（上記の表から、「グリム童話」に付けられた番号が連続していないことが分かる）、出典の明記が一切ないため、グリム童話のみを抽出するのは容易ではない。和田垣も星野もグリム童話研究に携わっていたわけではないので、困難な抽出作業をしたとは考えにくい。和田垣・星野訳『家庭お伽噺』にはイソップの話が一話も紛れ込んでいないのは紛れもない事実である。『教訓お伽噺』のほうは何らかの形で先に発表され、それを和田垣・星野が参照したとは考えられない。

### 1.5. 巖谷小波編『教訓お伽噺』の特徴

『教訓お伽噺』の37話では、和田垣・星野の翻訳がそのまま使われているわけではない。

グリムの【歌う骨】(KHM 28)では、大きく強い「猪」を退治した者に姫を与える、という御触れが出される。和田垣・星野訳でも「大きな猪」だが、巖谷編の「奇態な骨笛」では、「大猿」となっており、挿絵にも猿が描かれている。ならば、この話は小波が独自に翻訳したのかというと、やはり和田垣・星野訳の影響もみられる。弟が猪（大猿）退治に成功するが、妬んだ兄が弟を殺害し、手柄を横取りする。兄の悪事を暴露するのが弟の骨から作られた笛で、グリム版では次のように笛が歌う。「兄が私を殺して／橋の下へ埋めた。／猪を横取りした／王様の娘を手に入れるために」（第6版 Bd.1 S.174）ウェーナート版では、埋められるのは「橋」から「砂と石」の下に変わっているが、手に入れるのは lady で（S.102）、王の娘を意味している。和田垣・星野訳では、「私を殺したその人は／兄さんだ、兄さんだ、／猪ころしたその人は／私だ、私だ、／お國をもらつたその人は／兄さんだ、兄さんだ」（20-21頁）である。巖谷編のテキストでは「罪なき此の身を殺したは、／現在自分の兄さんだ、／あの大猿を仕止めたは、／今は骨なる此の身です。／手柄も無くて國とつた、／兄の仕打がうらめしや」（106頁）である。手に入れたのが「國」であるところが、和田垣・星野の訳への依存を暗示している。巖谷編のテキストにおいては、「うらめしや」という気持ちも歌われ、展開されてはいるが、根底には和田垣・星野のテキストの影響が見える。その他にも話の最後も似ているために、これも上記の酷似する点のある37話に含めた。

「白蛇の肉」（KHM 17）も特徴的である。グリムでのアヒル（カモ）が、和田垣・星野訳、巖谷編ともに鶯鳥に変わっていることは、本稿1.4.節の表で示した。この話では、白い蛇の肉を食べると動物の言葉が理解できるようになる。巖谷編には「鳴く鳥の言葉でも、飛ぶ蟲<sup>むし</sup>の言葉でも、まるで

人間のと同じ様に、ありありと解るのです」(130頁)とある。「飛ぶ蟲の言葉」というのは、グリムにもウェーナートにもないが、和田垣・星野の翻訳テキストの表現(2頁)と同じである。その他、グリム版でもウェーナート版でも、アリは「踏みつぶさないでくれ」と頼んでいるだけだが、巖谷編のテキストでは「蟻が飢えて動くことが出来ぬと云ひますから、自分が食べやうとしたパンをやつて、其命を救つてやり」(132頁)とあり、どのように蟻を助けたのかが詳しく描写されている。和田垣・星野訳には「或る時は、蟻の命を救ひ」(4頁)としかなく、詳細は書かれていない。『教訓お伽噺』の詳しい描写はオリジナルのようである。

「金の鍵」(KHM 200)も同様の例である。この話で少年は、小さな鉄の箱を見つけ、それを開ける。グリム版は「私たちは少年が蓋を開けてしまうまで待たなくてはなりません。そうすればどんな素敵な物が中に入っているか分かるでしょう」という言葉で話が終わり、中身は読者の想像にゆだねられる。このオープンエンディングの話の最後に、和田垣・星野は「なんでもこの子は、その後、村中一番の福々長者になつたと云ふとききました」(259頁)という一文を付け加え、明らかなハッピーエンドに変えた。巖谷編のテキストには「中からは山吹色のお金が、しかも一ぱい出ました」(282-283頁)と、さらに中身が具体的に描かれている。原典では、主人公の少年は「貧しい」と規定されているのみであったが、和田垣・星野が「孝行」という属性を付与し、少年を最後に金持ちにしたのだが、これが巖谷編でも踏襲され、さらに描写が加えられたとみられる<sup>19)</sup>。

### 1.6. 「鷺鳥料理」

「鷺鳥料理」は37話のうちのひとつであり、巖谷小波による独自の翻案というより、和田垣・星野が自由に翻訳したテキストが利用されたものと考えられる。料理人がつく嘘の中にそのことが如実に現れている。客が逃げ去るように仕向けるために、料理人は何というかを比べてみよう。

巖谷編：「イヤ實<sup>じつ</sup>は何です。内の主人は人間の耳が……牛の舌よりも旨いとかで、  
貴<sup>あなた</sup>方方に鶯鳥を差し上げて、其のお禮<sup>れい</sup>に耳を貰ふと云つて居ました」（331頁）

和田垣・星野訳：「實<sup>じつ</sup>はうちの主人は、人間の耳は、牛の舌よりも美味いとかで、  
貴<sup>あなた</sup>方がたに鶯鳥をおごるかほりに、耳をお禮<sup>れい</sup>に貰ひたがつて居ます」（170頁）

「牛の舌よりも旨い」という表現は、グリム版にもウェーナート版にもない。主人があなたの両耳を切ろうとしているから逃げろ、と（虚偽の）忠告をするだけである。そもそも耳を切る目的については説明がない。

この話は広い地域で語られており、国際昔話話型ではAT 1741「司祭の客と盗み食いされた鶏」<sup>20</sup>に分類されている。『昔話百科事典』によれば、ヨーロッパから中東、アジア、インド、アフリカに笑話として流布している<sup>21</sup>。「一つでいいから」というのが二通りの意味で解釈されるところに笑いが生まれる。二つある部位であれば語りとして成り立つため、耳の代わりに睾丸の場合もある。

グリム兄弟が書いた「賢いグレーテル」への注釈には、パウリ（Johannes Pauli）の『冗談とまじめ』（1522年）第364話「料理女が二羽のローストチキンを平らげたこと」が類似の話であることが指摘されている<sup>22</sup>。グリム兄弟は、こうした語りの系譜上にあることを理解した上で、この話を採用したのである。ところが、和田垣・星野が「鶯鳥」に変えた上に、客を二名に増やし、鶯鳥三羽を焼かせることに変えた。二名の客がそれぞれ一羽ずつ持ち去るという設定となったが、それでは主人が食べる分の一羽が残るはずであり、主人が客を追いかける理由が弱い。AT 1741のタイプの話の笑いのポイントである「一つでいいから」という言葉は、ひとりの客が二羽とも持ち去るからこそ出てくる言葉である。邦訳では一羽ずつ二名が持ち帰っているため、この言葉は削除されている。これらの変更は全て和田垣・星野が行ったもので、それが巖谷編のテキストでも同じなのであ

る。では料理人の性別はどうだろうか。和田垣・星野の「氣のきいた料理番」を見てみよう。

そのときお抱への料理番に言ひつけて、鵝<sup>がでう</sup>鳥を三匹料理させました。料理番は、日頃の手なみをふるつて、言ひつけられた通り鵝鳥の料理にとりかかりましたが、出来上がつて見るといかにも美味さうで、自分ながら喉がぐびぐびして來ましたので、エエままよ、とこつそり皆食べてしまつて、そしらぬ振をして居ました。(169-170頁)

本文には性別の明記はないが、喉がぐびぐびする、三羽とも鵝鳥を食べしてしまうという箇所は、男性を想像させる。巖谷編のテキストでは「食ってやれ」という言葉もあり、男性らしさが増している。こうして、挿絵(図1)に男性の姿が描かれたのである。

巖谷編の「鵝鳥料理」は、このように姿を変えてはいるが、遡っていくと、和田垣・星野の翻訳、ウェーナート版英語訳、さらにはグリム童話【賢いグレーテル】に行きつくと考えられる。

## 2. 『教訓お伽噺』の編者について

### 2.1. 和田垣・星野訳『家庭お伽噺』にない話

前節で指摘したように、『教訓お伽噺』は何らかの形で和田垣・星野訳『家庭お伽噺』を利用しているように見える。これはどういうことなのだろうか。

星野久成に関しては、英語教育に携わっていたこと以外にはほとんど情報がないが、和田垣謙三(1860-1919年)は著名な経済学者で巖谷小波と面識があった。小波が18歳の時に洗礼を受けたのが番町教会で、ここで二人がしばしば顔を合わせていたことが、小波の明治20年代の日記に書かれ

ている。明治21年4月20日には、ドイツ人ヘーリングの説教を通訳する予定の和田垣が来られなくなり、小波が急きよ代役を務めている<sup>23</sup>。しかしながら『教訓お伽噺』が刊行された明治40年代の二人の関係は不明である。

『教訓お伽噺』のうち42話はグリム童話（と聖者伝）に遡ることができ、本稿の考察から、そのうちの37話は和田垣・星野の翻訳に良く似ていることが分かった。本節では残りの5話に焦点をあてる。

その5話のうち4話は、「十二王子」（KHM 9）、「獅子釣り」（KHM 132）、「狐は下男」（KHM 73）「小雪姫」（KHM 53）で、これらは和田垣・星野は訳出していない。残る1話は「赤い帽子」（【赤ずきん】KHM 26）で、和田垣・星野も「赤帽さん」として訳出しているが、そこでは話は悲劇的に終わっており、赤ずきんと祖母は狼に呑み込まれたまま助からない。和田垣・星野がウェーナート版を底本としたためである<sup>24</sup>。巖谷編の「赤い帽子」では、グリム版と同様に猟師が登場し、狼の腹を切り裂いて赤ずきんと祖母を助け出しており、他にも和田垣・星野訳の特徴との一致点はみられない。

この5話を考察するにあたり、巖谷小波の著作年表を確認してみたい。昭和女子大学近代文学研究室作成の巖谷小波の著作年表<sup>25</sup>には、『教訓お伽噺』は明治44年12月31日刊行、『教訓お伽夜話 前編』大正8年9月15日刊行と掲載されている。ところが、弟子の木村小舟が作成した「小波お伽噺著作年表」<sup>26</sup>や、巖谷の四男（大四）が著した伝記<sup>27</sup>の巻末「年譜」には両書とも記載されていない。多作の小波にとって、これらは代表作ではないという意味なのだろうか。「意外の好評を博して、版を重ねること五六回」、再編集して『教訓お伽夜話 前編』を出したにしては、そうした扱いは少々腑に落ちない。

巖谷大四が作成した「年譜」には、『教訓お伽噺』が刊行された明治44年に、「十二月、パラチフスに罹り、病臥のまま越年」<sup>28</sup>とある。罹患したのは12月2日らしい。その年も多忙を極めたのだろう。『教訓お伽噺』の

巻頭に小波自身が次のように書いている。「編者は恰も此の書の校正中、重患に罹つて執筆が出来なくなつた。仍て前々から本書の編輯にたづさはつて居る木村小舟子に命じて、ただ思ふ所だけを記さしめた」(下線は筆者)。ここで木村小舟が携わっていたということがヒントとなる。確かに『教訓お伽噺』には、表紙にも「巖谷小波編」とあり、「訳」とは表記されていない。翌年に刊行された『姉妹篇』の『教訓お伽噺 東洋之部』(博文館)の巻頭の「凡例」にも、「本書の執筆は、前篇同様木村小舟子の手になつたものが多い」(下線は筆者)とある。つまりは、「西洋」「東洋」ともに木村小舟が主に担当したということのようだ。

## 2.2. 木村小舟

次に「木村小舟著作目録」を見てみると、『教訓お伽噺』と『お伽夜話』が共に著作として挙げられている<sup>29</sup>。木村は、自らの著作リストを作成するにあたって次のように述べている。「今手許に扣本のない為に、私自身にも忘れられたものもあろう。又他人名義になっているものも少なくないし、殊に先生(巖谷小波)の補助をして、筆を執つたものもある」<sup>30</sup>。こうした情報を考え合わせると、『教訓お伽噺』の本文を主に担当したのは木村小舟だと推測できる。著名な巖谷小波の名前を前面に出すというのは、出版社の意向としても容易に想像できる。

岐阜に生まれた木村小舟(本名 定次郎1881-1955年)は、代用教員をしながら雑誌への投稿をしていたが、彼の才能を見出したのが博文館の主筆を務めた巖谷小波であった。木村は1900(明治33)年に博文館に入社し、木村小舟という筆名を使い始める。これは巖谷小波と、挿絵画家の武内桂舟から一文字ずつをもらった名前である<sup>31</sup>。

博文館の雑誌『少年世界』は毎号、巻頭に小波の「お伽噺」を掲載していたが、先行研究によれば、小波の渡独中(1900-02年)に代筆が行われており、1901(明治34)年の7巻1号に小波作として掲載された「牛長者」



は、実際には木村が書いたものだという<sup>32</sup>。

木村といえば、グリム童話の日本での受容にも名前が登場する。1908(明治41)年に博文館から『教育お伽噺』を出しているのである。これに関しては、中山淳子による示唆的な指摘がある。「木村小舟の『教育お伽噺』の十四話の部分は、ほとんどこの日本語訳からの書き直しであることは、タイトルを見ただけでもわかる。「狼と七匹の子山羊」,「見鳥」,「ホルレー夫人」,「穀物の穂」は『第一学年』日本語訳とまったく同じである。」<sup>33</sup> この日本語訳とは、ドイツのラインらが著した『小学校教授の理論と実際』を波多野貞之助と佐々木吉三郎が翻訳した『小学校教授の実際』<sup>34</sup>で、木村小舟はこれを利用しているのだ。それは「グリム十四話のタイトルにも明らかで、波多野らの訳に多少加筆した程度で踏襲している」<sup>35</sup>。こうしてタイトルも含めて踏襲するという行為は、本稿の考察にとっても非常に示唆的である。というのは、前節で指摘したように、巖谷編『教訓お伽噺』と和田垣・星野訳『家庭お伽噺』との関係と良く似ているからだ。

そして、和田垣・星野の翻訳との類似点がない5話のうち、「赤い帽子」「小雪姫」「狐は下男」は、三年前に木村小舟の『教育お伽噺』にも掲載されている。まずは「赤い帽子」をみてみよう。

巖谷編：むかしむかし一人の女の子が、田舎に居るお婆さんの、誕生日のお祝ひに、お菓子と葡萄酒とを持って、野原や森や山の彼方のお婆さんの家へ出かけましたが（450頁）

木村小舟：或る田舎に紅帽子と云ふ、可愛らしい小娘がありましたとさ、或る日のこと、紅帽子のお母さんは紅帽子を呼んで云ひますには『コレ紅帽子や、ここにネお菓子箱があるから之を祖母さんの所へ持つて行つてお上げ、今日はお前の好きな祖母さんの誕生日だから、之をお前が持つて行けば祖母さんはどんなにお喜びになるだらう』（45頁）

グリム版では、祖母の「誕生日のお祝い」という記述はなく、病気の祖母を見舞う。巖谷の「紅帽子」には「誕生日」という表現がある。巖谷編のテキストは、全体として短いが、木村の「紅帽子」に似ている。木村のテキストには「葡萄酒」は出てこないが、先行する『小學校教授の實際』の「紅井帽子」では、母親は娘に菓子と葡萄酒を持たせている<sup>36</sup>。木村が『教訓お伽噺』を編纂するにあたって、『小學校教授の實際』を再度参照したのかもしれない<sup>37</sup>。

巖谷編『教訓お伽噺』「狐は下男」(KHM 73)も同様に木村の「狼と狐との話」を短くした話のようだ。木村はこれにも『小學校教授の實際』を利用したようだが、そこでの誤訳（もともとは誤植の可能性もある）がそのまま巖谷編の「狐は下男」まで残されている。狼が食べるのは「子山羊」だが、その母親は、邦訳の三つのテキストではみな「羊」となっているのである。

「小雪姫」も、同様に木村の『教育お伽噺』から採られたとみられる<sup>38</sup>。タイトルは異なり「雪姫物語」であるが、本文中では姫の名前は小雪姫となっており、内容もほぼ同じである。ただ、「小雪姫」は『小學校教授の實際』には掲載されておらず、木村の『教育お伽噺』の「雪姫物語」の出自（翻訳の経緯）は不明である。

こうして、『教訓お伽噺』で和田垣・星野の翻訳と関係のない5話のうち、以上の3話においては、木村小舟の先行書『教育お伽噺』のテキストを利用したとみられる。残る2話「十二王子」および「獅子釣り」の出自や翻訳の経緯は今回の調査では明らかにできなかった。これに関しては今後の課題としたい。

最後に補足しておくが、木村の先行書『教育お伽噺』には、上述の3話の他にも『教訓お伽噺』と共通する話がある。「恵みの鍋」「麦の穂」「奇妙な音楽者」が、「粥の海になつた話」「穀物の穂」「市街音楽者」というタイトルで収められている。しかしながら『教訓お伽噺』の話は、和田垣

・星野の翻訳に近い。なかでも「恵みの鍋」は、和田垣・星野がかなり大胆に話に手を加えているため、これが利用されたことを暗示している<sup>39</sup>。

『教訓お伽噺』にはイソップ寓話も掲載されているが、グリム童話に関しては、和田垣・星野の翻訳テキストとの一致点が多いことを、本稿の前半部で示した。本稿の後半部では、『教訓お伽噺』を主に手がけたのは木村小舟とみられる根拠を示した。木村小舟は、病弱で正式な学校教育を受けておらず、その語学力は不明という<sup>40</sup>。そして、木村が手掛けた（と考えられる）「お伽噺集」は二冊とも、不自然なほどに先行する邦訳書との一致点が多い。こうした採用の仕方は、もしも著者の許諾を得ていないのであれば現在の著作権には抵触するが、明治期には、挿絵だけでなく、テキストまでもが自由に利用されていたことを示している。

### おわりに グリム童話の受容——「グリム童話」翻訳とは？

巖谷編の「鶯鳥料理」は、遑るとグリム童話にたどりつく。あまりにも話が変わっているために、これを「グリム童話」の翻訳とみなすべきかという問題が生じる。そもそもこうした問題は、日本に限ったことではなく、グリム童話の翻訳受容を研究する際に対峙せざるを得ないものである。グリム童話は、翻案からパロディやマンガまで様々な形で受容されているため、どこまでを対象とするかを考えなくてはならない。極端な形で対応したのが、フランスのグリム童話翻訳を論じた Ochs の研究である<sup>41</sup>。Ochs は『グリム童話集』のフランス語翻訳のうち、「匿名での翻訳」「一話のみの翻訳や100頁以下のもの」「明らかな翻案」「ペローやアンデルセンとともに刊行されたアンソロジー」を排除することによって、明確な線を引いている。論文としての一貫性はあるものの、広く読まれた形でのグリム童話翻訳が対象から排除されてしまっている。それにより見えてくるものは何であろうか。グリム童話のフランスでの受容というよりも、限定

された翻訳論となっている。

総じて明治期にはかなり変容された形でグリム童話は受容されていたが、どこまでをグリム童話とみなすかという問題は残る。『教訓お伽噺』も『家庭お伽噺』も原典とはだいぶ異なる姿となっているが、実際にどちらも好評を博し、何度も再版されている事実がある。本稿で『教訓お伽噺』の経緯を考察したのは、グリム童話の日本での受容の一端をたどるためである。

## 注

- 1 巖谷小波編『学校家庭 教訓お伽噺 西洋之部』博文館，明治44年。本稿の引用では，以下は頁数のみを明記する。なお「々」以外の踊り字は使用せず，改行も適宜省略した。
- 2 本稿では，明治期の邦訳タイトルと区別するため，『グリム童話集』でのグリム兄弟によるオリジナルのタイトルの和訳は【 】で示す。慣例に従い，『グリム童話集』（Kinder- und Hausmärchen）の各話に，第7版（1857年）での収録番号をKHMとともに示す。
- 3 明治20年代の翻案作品については以下を参照。長澤修一「巖谷小波の翻案世界—明治二〇年代をめぐる」『梅花女子大学文学部紀要 比較文化編』第5号，2001年，1－24頁。
- 4 上田敏郎『巖谷小波とドイツ文学 <お伽噺>の源』大日本図書，1991年。
- 5 11歳の時に，留学中の兄が送ってくれたという。当初は絵を見て楽しんだようだが，小波の日記には，明治20年2月12日他に「オットーメルヘン読む」などの記述がある。桑原三郎監修『巖谷小波日記〔自明治二十年至明治二十七年〕翻刻と研究』慶應義塾大学出版会，1998年，8頁。
- 6 349－351頁。挿絵は別の画家が担当しており，図1のように料理人ではなく，鴛鳥が描かれている。『教訓お伽夜話 前編』に新たに加えられたのは，アンデルセンの話である。
- 7 川戸道昭他編『児童文学翻訳作品総覧 第4巻 ドイツ編』大空社，2005年所収。
- 8 725頁。小波は著作が多いため，ここでは少々混乱した記述となっている。書名は明治44年の『教訓お伽噺』となっているが，刊行年と各話のタイトルは『教訓お伽夜話』による。本稿ではここに「グリム童話」として取り上げられていないことに着目した。
- 9 これは『グリム童話集』の1857年第7版（グリム兄弟自身が手掛けた最後の版）より前に刊行されている。1850年の第6版をもとに翻訳されたとみられる。以下を参照。西口拓子「澁江保訳『西洋妖怪奇談』の挿絵と底本について——挿絵からみた明治期

- グリム童話翻訳』『専修人文論集』第92号，専修大学学会，2013年，143－164頁。本稿では，グリム童話のオリジナルテキストに言及する際には，第6版と第7版の両方を参照している。Wehnert 版は筆者蔵の以下の版から引用する。Household Stories. Collected by the Brothers Grimm. With Two Hundred Illustrations by E. H. Wehnert. London. 刊行年は推定1900年前後である。
- 10 西口 2013年参照。西口拓子「和田垣謙三・星野久成訳『グリム原著 家庭お伽噺』——底本と翻訳」『専修人文論集』第99号，専修大学学会，2016年，451－477頁。
  - 11 中山淳子『グリムのメルヒェンと明治期教育学』臨川書房，2009年，117頁。
  - 12 西口 2016年参照。
  - 13 西口 2016年参照。
  - 14 本稿での引用は，和田垣謙三・星野久成訳『グリム原著家庭お伽噺』（第18版，小川尚栄堂，1919年）による。以下は頁数のみを明記する。
  - 15 西口 2016年，464－466頁。
  - 16 Kinder- und Hausmärchen gesammelt durch die Brüder Grimm. 6. Aufl. 2 Bde. Göttingen 1850.
  - 17 KLは，「子どものための聖者伝」を指す。『グリム童話集』第7版には巻末に10話の「子どものための聖者伝」が掲載されている。
  - 18 昭和女子大学近代文学研究室『近代文学研究叢書 第35巻』昭和女子大学近代文化研究所，1972年，139頁。
  - 19 グリム版もウェーナート版のタイトルも【金の鍵】だが，和田垣・星野は「孝行の徳」とした。巖谷編では「金の鍵」となっているのは，本文中に金の鍵が出てくるためだろう。その他の話においては，和田垣・星野のタイトルの影響がみられる。本稿第1.4.の表参照。
  - 20 アールネが作成し Thompson が改訂した話型番号。Thompson, Stith: The Types of the Folktale. A Classification and Bibliography. Helsinki 1981. (FFC No.184) ドイツのウターによる改訂版（2004年，改訂版2011年）がある。邦訳は『国際昔話話型カタログ』ハンス＝イェルク・ウター著，加藤耕義訳，小澤昔ばなし研究所，2016年。AT 1200－1999番は，「笑話と逸話」に付けられた番号であり，これは明らかに笑話である。
  - 21 Kooi, Jurjen van der: Priesters Gäste. In: Enzyklopädie des Märchens. Hrsg. v. Kurt Ranke u. a. Berlin 1975ff., Bd.10. S.1308-1311, hier S.1309.
  - 22 Rölleke, Heinz (Hrsg.): Kinder- und Hausmärchen gesammelt durch die Brüder Grimm. Stuttgart 2006, Bd.3. S.138.『冗談とまじめ』名古屋初期新高ドイツ語研究会訳，同学社，1999年参照。
  - 23 桑原 1998年，45頁。巖谷大四『波の聲音 巖谷小波伝』新潮社，1974年，46頁。
  - 24 西口 2016年，470－471頁参照。
  - 25 昭和女子大学近代文学研究室 1972年，84頁，108頁。

- 26 木村小舟編『小波作・桂舟画 明治のお伽噺』（上下巻）小学館，1944（昭和19）年。  
「小波お伽噺著作年表」は下巻に所収。武内桂舟（1861－1943年）は挿絵画家である。
- 27 巖谷大四 1974年。
- 28 巖谷大四 1974年，267頁。
- 29 飯干陽『木村小舟と『少年世界』』（あずさ書房，1992年）巻末の「木村小波著作目録」参照。同様に本文中（16頁）でも，両書が木村小舟の著作として掲載されている。
- 30 半自叙伝『足跡』の中の言葉。飯干（前掲書）からの引用。飯干 1992年，15頁。
- 31 木村は『足跡』に次のように書いている。「少年世界の巻頭に，いつも小波桂舟と，並び掲げられてあるのを見て，此の両先生から一字つつ，無断借用したに過ぎない」（飯干 1992年，33頁。）
- 32 藤本芳則『『少年世界』の小波お伽噺——渡独までを中心に』大阪国際児童文学館『国際児童文学館紀要』23号，2010年，1－15頁。13頁参照。
- 33 中山 2009年，75頁。
- 34 ヴェー・ライン等著『小學校教授の實際 第一学年の部』波多野貞之助，佐々木吉三郎訳，同文館，明治35年。原書は“Theorie und Praxis des Volksschulunterrichts nach herbartischen Grundsätzen. Das erste Schuljahr” bearbeitet von Wilhelm Rein, A. Pickel, E. Scheller. 6. Aufl. Leipzig 1898.『小學校教授の實際』に関しては奈倉洋子『日本の近代化とグリム童話』世界思想社，2005年も参照。
- 35 中山 2009年，189頁。
- 36 中山 2009年，251頁以降参照。
- 37 ドイツでは「赤ずきん」がワインボトルを持参することはよく知られており，小波が気づいて加筆した可能性もある。ベルリン滞在時に小波が見た「お伽噺活人画」には，「赤頭巾」も含まれていた。『小波洋行土産 上巻』博文館，1903年，279頁。
- 38 小波が明治29年に『少年世界』に発表した「小雪姫」は，【白雪姫】の翻案で，話は大きく書き換えられている。そこでは王子も登場しなければ，最後の「結婚」もない。
- 39 ラインらのテキストでは母親と娘が入れ替えられているが，その変更を木村も『教育お伽噺』でそのまま取り入れているが，『教訓お伽噺』では入れ替わっていない。
- 40 中山 2009年，191頁。
- 41 Ochs, Anna: Neuübersetzung der Grimmschen Märchen ins Französische. Die Reise des deutschen Märchenbes in das Land Perraults. Eine Kulturhistorische Betrachtung. Berlin 2014.